

蓮は泥に根を張り、そこから茎を凜と伸ばし美しい華を咲かせます。泥が濃いものであればあるほど、より大きな華が咲くといえます。そのような特徴から、仏教では蓮を仏の智慧の象徴として用いています。

仏教、初期のお経である『ダンマパダ』には、

「大通りに棄てられた塵や芥の山の中から、かぐわしく美しい蓮華が生ずるように、大勢の人の中で、目覚めた人の弟子は智慧を持って輝く。」

泥から生じた蓮が、泥によごされずに美しい華を咲かせるように、仏の智慧は迷いに満ちた心や世界に染まることのないことを表しています。

このように、初期の仏教では、迷いの象徴である泥と、智慧の象徴である蓮をはっきりと比べる形で、仏の智慧のすばらしさを表しているといえます。

初期の仏教教団が成立してから約四百年後、大乘仏教が興ります。中国大陸・朝鮮半島を経由して日本に伝わったのは、この大乘仏教です。

大乘仏教も、蓮を重要な象徴として用いています。むしろある意味、初期より重要視しているといっていいいでしょう。その象徴の意味づけにおいても、新たな展開をみせています。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

大乘仏教のお経のひとつに『維摩経』があります。この中に、蓮を象徴的に扱っている箇所があります。

「地上の乾いた土では、蓮の華は芽を出さないが、湿った泥からは蓮の華は生じる
煩悩の大いなる海に下りることなくして、仏の智慧という宝を得ることはできない」

泥を、煩悩の喩えで用いています。

初期のお経の泥に染まらない蓮の華という喩えに対し、大乘仏教では泥こそが蓮の華を咲かせるという面を強調しています。

煩悩がなければ仏の智慧を得ることはできない、ということです。自分自身が持っている根深い欲望をしっかりと認識するということです。自分の中には、「泥」があるということを見つめることです。

その上で仏の道を歩いていくということを、大乘仏教は私たちに伝えているのではないのでしょうか。

泥に根を張り美しい華を咲かせる蓮を見ながら、私たちは自分の心の中を見つめるべきなのかもしれません。

— 終 —